



全

編出雲弁落語をとにかく一つこしらえて、その子に見せてみようと考え、共通語テキストの翻訳にとりかかった。これが自分でやっつけておもしろくてならなかった。これまであまた文章を書いてきたが、ほぼ百パーセント無表情か眉間に皺を寄せているかしている。それが声を出して笑ってしまうのである。登場人物は明らかに、東京か大阪の人から、松江の、ぼくが子どもころそこらじゅうにいたおつつあん、おばさんになった。彼らのいる空間さえ、ぼくのよく知っている場が変わった。

落語のもっている空気感はこれだなと思う。東京落語が描く長屋とは、その作者あるいは演者が生まれ育ったところを描いているのであって、それが濃密な分だけ、そこで暮らしていない者にはハンディになるのだ。外国文学を読んでいるようなものか。別にそれでおもしろさが減じることはないし、理解しにくいこともないのだが、なじみの濃淡は、鏡胴をくりくりと回してピントを調整しなければならぬが、出雲弁だとほぼ無条件で合う。おつつあんもおばさんも生き生きと動き出す。これには驚いた。

しかし、それは出雲弁を浴びて育ったぼくを感じるところであって、これからそれを話そうとする子どもたちにとってはまったく逆になる。

テキストを渡し、何度か読み聞かせ、あとは自分でやっつけて、というのが通常のぼくの稽古パターンだ。わが落語教室では、稽古とは公演に向けての練習を意味し、どの程度するかさじ加減は子どもや保護者に委ねている。公演前に「お願いします」と連絡が入れば、子どもの話を聞いて、気の付いたことを指摘し、じゃあ本番がんばってね、で終わり。

しかし、出雲弁落語の場合、テキスト通りに言えないから、というわけにいかない。アクセント、イントネーション、一つ一つやってみせる必要がある。これは実際に難しかった言葉の一つだが、自分を指す「おら」という代名詞をその子は二拍目を下げて発音する。子どもにとってはその方がなじみがある。でもそれだと出雲弁には聞こえない。どこか別のいなかの人物になってしまう。ここは二拍目を上げないといけない。指摘すると直る。ぼくはなじみの「おら」に出合い安心する。ところがなじみの薄いその子は、しばらくするとまた出雲人ではない「おら」になってしまふのだ。

でも、そんな小さなやりとりが無性におもしろかった。苦勞して何とか完成させたその子が全編出雲弁落語をこの夏高座にかけた。とつてもウケた。ぼくが書いてウケたんだから、子どもが語ればなお楽し。

老い老いに

木幡智恵美

7

と

ところで、夕焼け通信が二年目を迎えた一九九四年とはどんな年だったのだろうか。前年の八月に発足した連立政権の細川内閣は、八か月後のこの年四月首相の辞意表明で羽田内閣にバトンを繋いだ。その羽田内閣も日本社会党の連立離脱によりわずか二か月で幕を下ろし、自社さ連立政権のもと、村山内閣へと移っている。向井千秋さんがスペースシャトルで宇宙に飛んだのもこの年だ。痛ましい事故も起きている。中華航空機が名古屋空港で着陸に失敗し、二百六十四人が亡くなったのだ。海外では、ルワンダでこの年四月から百日間にわたる大虐殺が行われており、七月には朝鮮民主主義人民共和国の金日成が亡くなった。

平成の米騒動と言われ米不足に陥っていた冷夏の前年とは打って変わり、この年は記録的な猛暑となり、渇水も史上最悪となっている。今年の夏は異常な暑さで、連日熱中症警戒アラートが発せられ、猛暑日や熱帯夜が続いた。八月二十二日には松江でも三十八点二度、これまで最高気温になったかと思っていた。ところが、一九九四年八月一日に松江で三十八点五度にまで上がっていたのだ。夕焼け通信の編集後記からもうかがえる。「梅雨入りしたというのに雨が降りません。五箇は米所、水不足が深刻です。群をなして泳いでいたメダカたちもどこへやら避難しようです。」Aさんは、「この夏は、連日記録的な猛暑が続ききました。梅雨らしい雨がなかったせいもあり、ニュースはいつも全国各地の水不足を伝えていました。そんな少雨猛暑の年、私に運悪く田んぼの二つの水当番が回ってきました。：(中略)：今年のような水飢饉には決まって水喧嘩が少なからずあります。一滴でも多く自分の田に水を引きたいと思う気持ちはよく分かりますが、極端なやり方方には腹が立つてきます。水が無く、大きく地割れした田を見ながら近所の人々が諦めたように言っていました。『今年は草履履きで稲刈りができます。』昨年の長雨冷夏、今年の少雨猛暑。続けて異常気象に悩まされまうでしようか。」猛暑、水不足の様子がありありと記されている。その年その年の貴重な記録としても、夕焼け通信は意味あるものかなと読み返しながら思った。

30代フリーター 石破内閣発足直後の朝日新聞の世論調査（10月1、2日実施）では、今後も自民党を中心とした政権が続くのがよいか、立憲を中心とした政権に代わるのがよいかとの質問に、「自民中心」48%、「立憲中心」23%だった。政権交代の可能性は一時期にくらべて遠のいた。

年金生活者 日本の半数以上の有権者は選挙を「自民党を励ます会」みたいと考えていて、自分たちの意に沿う政治をすれば「よくやった」と大量の票を贈り、意に反することをやれば

「しつかりしろ」と票を減らしてリハビリのためのお灸をすえる。そこには選挙を政権を取り替えるためのシステムとして扱う発想はない。

石破茂が総裁に当選後あからさまな変節を見せたのも、それをよく知っているからだ。すぐはしないと知っている。衆院の解散を最短ですることにしたのも、株価の急落を恐れて金融所得課税の強化や利上げに慎重になったのも、それで鍼灸治療を受けさせられる

西欧で誕生した近代の民主主義は政権交代のためのシステムであり、それは「王殺し」を無血化した制度とみなすことができる。「王殺し」のない天皇制はそれになじまない。

30代 戦後、天皇は象徴になり、政治を動かすほどの威力は失ったはずだ。

年金 象徴天皇制は国民の手による政権交代、無血の「王殺し」を全面的には認めていない。日本国憲法に天皇の国事行為として内閣総理大臣の任命が定められているのがその証左だ。それは江戸時代より前の時代に天皇が征夷大将軍を任命してきた歴史の名残りにほかならない。

総理大臣の任命は選挙とそれによって構成される国会の指名にもとづいているから、将軍とは違うという異議が出されるかもしれない。だが、徳川将軍も幕府が「指名」したのを天皇が追認していた点では変わりない。

30代 天皇制が政権交代を阻む力となつているとすれば、それを排除するには天皇制を終わらせなければならな

ことはあつても、余命宣告を受けることはないだろうと踏んだからだ。

30代 1993年の細川連立政権の成立や、2009年の民主党政権の成立は、国民が自民党を励ますのをやめて、見切りをつけた結果ではないのか。

年金 それらは政権の担い手がそっくり入れ替わる欧米諸国の政権交代とは異なり、実態は「疑似政権交代」だった。

細川連立政権は自民党にいた小沢一郎らが党を割って新党をつくり成立させたし、民主党政権の成立の立役者はやはり小沢だった。いずれも、それまで自民党の派閥間で行われていた「疑似政権交代」が党の外部にまで拡大した結果と考えることができる。

30代 汚れたものをきれいなものに取り替えるのではなく、同じものをきれいに洗って使えばいいというみそぎの発想か。

年金 支配者は「万世一系」であり、交代は代替わり以外にあり得ないという伝統が日本人のメンタリティーに根をおろしている。

い。圧倒的多数の国民が象徴天皇制を支持している現在、それは不可能なことだ。

年金 天皇制を終わらせることができるのは天皇自身しかいないかもしれない。先の大戦を終わらせたのは政府でも国民でもなく、天皇だった。戦争末期に国民の多くは「戦争はもう嫌だ」

天皇制には、フレイザーが『金枝篇』で取り上げたような「王殺し」による権力の「交代」がない。「王殺し」は老齢や病気で生命力の衰えた王が災厄を招かないように殺害した未開社会の風習だ。これに対し、天皇の「交代」は殺害ではなく大嘗祭という祭儀によって行われる。

これは天皇が「王殺し」のあつた社会の王にくらべ民衆に近い位置にあり、いわば民衆に信頼されていたことを推定させる。この天皇と民衆の距離の近さは、大和王権の成立の過程に起源がある。

吉本隆明の考えを借りるなら、日本に統一国家を成立させた勢力は、各地の群立国家の神を拝む代わりに、自らの神を群立国家に拝ませるといって「交換」によって支配を広げていった（「敗北の構造」）。群立国家の支配者と民衆にとって、格上の勢力に自分たちの神を拝んでもらえば、自らのアイデンティティーはより強固になる。それをやつてくれる天皇を「殺害」することなどあり得ない。

と感じていたはずだ。でないと、アメリカの押しつけた平和憲法をすんなり受け入れることなどなかっただろう。それほど嫌な戦争なのに、国民は自らの決断で終わらせることができなかった。

30代 天皇や皇族が天皇制を終わらせることなど考えるはずがないだろう。**年金** 明瞭に意識されていなくても、いつか終わるかもしれないというならば無意識の予感はあるかもしれない。天皇の後継者不足をなんとかしなければならぬという危機感には天皇からその一族からも伝わってこないからだ。与野党は「安定的な皇位継承」のために「立法院の総意」をとりまとうとしながら、できないままにいる。国民の関心も高まっていない。

このまま推移すれば、いつか皇統は断絶し、天皇制は自然消滅する可能性がある。そのとき日本国民は、自己決定を絶えず迫られる、いわば吹きっさらしのなかに立たされるかもしれない。

ニュース日記 941
中村 礼治

政権交代と天皇制